

京都大学教育研究振興財団助成事業
成 果 報 告 書

平成22年6月25日

財団法人京都大学教育研究振興財団
会 長 辻 井 昭 雄 様

所属部局・研究科 経済学研究科

職 名・学 年 博士後期課程2年

氏 名 阪 本 浩 章

事業区分	平成22年度・国際研究集会派遣助成	
研究集会名	持続可能な資源利用と経済動学に関する国際会議	
発表題目	Climate change, economic growth, and health	
開催場所	スイス連邦, ティチーノ州, アスコーナ	
渡航期間	平成22年6月6日 ~ 平成22年6月11日	
成果の概要	タイトルは「成果の概要/報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 無 有 (Best Presentation Award賞状写し)	
会計報告	交付を受けた助成金額	200,000 円
	使用した助成金額	200,000 円
	返納すべき助成金額	0 円
	助成金の使途内訳 (使用旅費の内容)	112,000円 (往復航空券)
		88,000円 (滞在費・登録料の一部)

成果の概要 / 阪本浩章

研究集会名: 持続可能な資源利用と経済動学に関する国際会議
開催場所: スイス・ティチーノ州・アスコーナ・モンテヴェリタセミナーセンター
渡航期間: 平成 22 年 6 月 6 日~平成 22 年 6 月 11 日
報告者: 阪本浩章(経済学研究科博士後期課程 2 年)

1. 会議の概要

持続可能な資源利用と経済動学に関する国際会議(SURED)は、2010年6月6日から6月10日にかけてスイス南部の湖畔リゾート地であるアスコーナにおいて開催された。SUREDは、環境・資源経済学の動学的な理論研究の成果を国際的に共有することを目的としており、小規模ながら第一線で活躍する研究者が多く参加することで知られる。今回の会議では、枯渇性資源利用における Hartwick ルールで知られる John Hartwick や、最適成長モデルを用いた持続加能性理論の大家である Geoffrey Heal、不確実性下での割引率分析で名高い Christian Gollier などが基調講演を行なった。個別の報告は Green Paradox, Trade, Games, Climate Change など合計 23 のセッションから成り、70 人余りが研究報告を行なった。

会議3日目に例年エクスカーションが設定されており、今回もアスコーナ周辺をグループに分かれて散策することになった。私自身は、数人の参加者と一緒に、平和条約や国際映画祭で広く知られるロカルノ市街を歩いて回った。ロカルノはスイスで最も標高の低いマッジョーレ湖沿いに位置しており、新緑の山肌を背景にして湖畔に立ち並ぶ歴史的な建造物が印象的であった。束の間の観光の最中に突然の豪雨に見舞われるというアクシデントはあったものの、それもまた雨宿りをしながら他の参加者との交流を深めるよい機会となった。

2. 報告の概要

私の報告は4日目にあり、“Climate change, economic growth, and health”というタイトルでプレゼンテーションを行なった。なお、この報告は、大阪大学の生藤昌子、Tilburg 大学の Jan Magnus との共同研究の成果である。

報告の内容としては、地球温暖化問題に関連する健康被害に着目することで、当該問題のグローバルな側面とローカルな側面との相互作用をモデルの中で明示的に記述し、地理的・社会的に異質な地域における最適な排出削減経路を分析するというものである。温室効果ガスの排出削減政策は、平均気温の上昇抑制というグローバルな便益と同時に、大気中の汚染物質の

減少による気管支疾患の減少といったローカルな便益をもたらす。このような温暖化政策の「副次的便益」は、個別の地域における二酸化炭素の排出削減を容易にし、国際条約への参加を促すように作用すると見られている。しかしその一方で、大気質の改善は上空のエアロゾルの減少を通じた局所的な気温上昇を引き起すことも予想される。そのため、とりわけ温暖化に対して脆弱な地域においては、温暖化政策の副次的便益は必ずしも歓迎されるべきものではない。

以上のような問題意識から、RICE モデルをベースとしたシンプルな統合評価モデルを用い、温暖な地域と寒冷な地域、貧しい地域と豊かな地域とで、健康被害を経由した温暖化のローカルな影響経路を分析した。今回は、分析の結果として、(1) アフリカ等の温暖な貧困地域において、気温上昇と並行して大気汚染の悪化が予測されること、(2) 温暖な地域においては、温暖化政策の副次的便益はその大部分が相殺されてしまう可能性があること、を報告した。これまでに、温暖化の健康被害やエアロゾルによる薄暮化について個別に考察する研究は存在したが、これらを同時にモデルに組み込み、なおかつ異質な地域における影響の違いを考察した例はなかった。そのため、今回の報告は思いの外好評を博し、会議の最終日には大変光栄なことに“Best Presentation Award”を頂くこともできた。

3. ネットワーキング

SURED は、研究報告の機会を提供すると同時に、研究者間のネットワーキングを促進するという側面を強く持っており、今回も参加者同士の交流の時間が多く設けられていた。私自身も、個人的な研究関心から事前に連絡を取っていた Reyer Gerlagh や Christian Traeger とミーティングの機会を持ち、論文や研究に対して貴重なコメントをもらうことができた。また会議の期間中に会った Geir Asheim や Frank Krysiak にも論文を丁寧に読んで頂くなど、大変に有意義な時間を過ごすことができた。

最後に、今回の国際会議派遣に対し助成して頂いた京都大学教育研究振興財団に厚く御礼申し上げます。

2010年6月25日
阪本浩章